風邪のひかない街

まえがき

新型コロナが流行し早半年。この生活にもだいぶ慣れてきた。現在私は、福岡で電車通勤をしているが、福岡でコロナ感染者が出てから同じ電車に乗っている人のつり革を持っている人の数が減ったように思える。それくらい市民の衛生意識が高まったということだが、最近各国が外出規制を緩和するなど徐々にコロナ排除からコロナとうまく付き合っていくという方向に舵をきっている。新型コロナも数年もすれば今のインフルエンザのような存在になるのだろうが、またいつこのような事態になるかわからない。これまであまり注目されていなかったが、コロナ騒動の機会もあって今回は衛生に強い街づくりについて考察してみた。

どうすれば衛生に強い街をつくれるか

先ほど、電車のつり革を握る人が減ったということを述べたが、そもそも私は新型コロナの流行以前からつり革はなるべく掴まないようにしていた。前に誰が触ったかわからないし、あまり衛生的にも良くないと思っていたからだ。しかし、考えてみれば手すりだったりドアノブ、エレベーターのボタンなど間接的に接触する場面はいくらでもある。そうやって新型コロナも世界中に広がったのだろう。

では、どうすればなるべく接触を抑えることができるのだろうか。常に手袋をしておくことは現実的ではない。人は、手を使うことで進化してきた生き物なので、手は剥き出しの状態でなければ器用に作業ができない。それに常にマスク、手袋となると暑苦しくてまともに体温調節すらできなくなる。そこで、簡単な作業は足を使うことである程度接触を抑えられるのではないかと私は考えた。足は常に靴を履いているし、頭まで距離があるので足で口周りを触ることもない。足による接触は手に比べるとはるかにリスクが少ない。センサーに比べて経済的にも有効的な手段なのではないだろうか。具体的な方法について考えてみる。

具体案

例えばトイレ。今のハイテクなトイレにはたくさんのボタンがあるが、全て足で操作しろというわけではない。一番使うのは流すボタンだが、これだけでも足でボタンを押せる装置を作ればかなり接触を抑えられるのではないか。エレベーターも同様に全ての階に対応させるのではなく、開く・閉じるといった最も使う頻度の高いボタンだけ対応させればよいのだ。ドアに関しては、技術的に可能だったとして今まで手で開けていたものを足でするなど下品だし違和感しかないと言われるかもしれないが、当たり前になってしまえば誰も何も言わなくなるだろう。水道の蛇口なども足で操作することは簡単なはずだ。

言い出すときりがないが、見渡せば街のいたるところに手じゃなくてもできるものがあることがわかる。これらを足に代替することで、使う人にとっても安心して生活を送ること

ができるのだ。
　この案はしっかり手を消毒しマスクをしていることが前提なのだが、いつかコロナが収束し街に平穏が戻った時人々はマスクを外し、衛生意識も低下することが予想される。
そうなったとき、これら設備を残しておくことで意識の低下を防ぐ一つのきっかけになるのではないだろうか。また、再びウイルス災害に見舞われた際迅速に対応することも可能である。

まとめ

　世界はもとより日本はもともと自然災害が多くこれまでその対策に重きを置き数々の困難を乗り越えてきた。
　しかし、誰しもが予期せぬ生物的災害により今世界は混乱し、戦後最大の試練とまで言われている。収束はするだろうが、だからと言って何もしなくていいわけではない。地震や台風のように次に来たるべき災害に備えなければならない。コストの面や人々に受け入れられるかなどの課題も多くある。しかし、いつか人々が皆元気で本当に風邪を恐れない街が実現できればと思う。